

# キャリア教育系基礎科目の分析

—ライフプラン・リスキリング・科目連携の視点から—

Analyzing Career Education Basic Courses

—from the Perspective of Life Planning, Reskilling, and Subject Integration—

ITAKURA Fumihiko

板倉文彦

日本語コミュニケーション学科教授

## 抄録：

日本における就業環境は変化しつつあり、リスキリングを伴うキャリア変更が今後増え続けることが想定されている。その状況下で、現状大学で行われているキャリア教育がその状況に追随しているのかを確認する必要がある。本稿では、現在日本の大学でどのようなキャリア教育が行われているのかの調査、分析を行い、その内容と傾向を明らかにした。

## Summary：

The employment environment in Japan is changing, and it is anticipated that career changes involving reskilling will continue to increase in the future. In this context, it is necessary to confirm whether the current career education conducted in universities is keeping pace with this situation. Therefore this study analyzes what kind of career education is currently being carried out at Japanese universities and reveals its content and trends.

キーワード：キャリアプラン、ライフプラン、リスキリング、スキルチェンジ、外的要因、内的要因

Keywords：career plan, life plan, reskilling, skill change, external factor, internal factor

## I. はじめに

筆者はこれまで、高等教育機関で行われているキャリア教育においては、キャリアプランを考えていく場合に将来起き得るライフプランも想定し、それを踏まえたキャリアプラン構築を可能

とするような教育が必要となることを論じてきた<sup>1</sup>。また、企業を取り巻くビジネス環境が変化し続ける現在の環境下において、就業者に対してリスクリングの必要性が増していることも論じてきた<sup>2</sup>。Society 5.0を迎えつつある現在においては、リスクリングの必要性が増していくことが想定されており、その過程においては実際にその教育を担う体制もあわせて構築していくことが肝要となり、一翼として高等教育機関が重要な役割を担うべきで、その対象は就業者のみでなく将来の社会を担う学生を意識したものが望ましいのである。本稿では実際に高等教育機関で行われているキャリア教育の中で、これまで提示してきたライフプランとリスクリングの要素がどの程度実現されているかの状況について調査・分析を試みることを主たる目的とする。

リスクリングは社会人が社内外で新たな職に就くことを想定し、それまでとは異なる新たなスキル修得を行うことである。今後リスクリングの機会が増えていくことを想定すると、現在の学生たちの多くが将来実際に直面することとなるであろう。そうなると、そもそもリスクリングによるスキルチェンジが行われその後に職種転換・転職等（以下、職の移行）が起こり得ることを今のうちから認識させることが肝要となる。実際に職の移行が起こる理由は、自身の意志による内的要因と企業理由等による外的要因が想定される。特に外的要因の場合は要員に対して突然降りかかることもあり得るため、やはりそういった状況が起こり得ることをあらかじめ理解していることが重要となるのである。

さらに筆者は高等教育機関で行われている一般科目（ここではキャリア教育科目以外の科目とする）とキャリア教育との連携にも着目している。現在高等教育機関で行われている一般科目には学生の将来キャリアにも影響し得る内容が多く含まれているが、それが学生の認知につながっている可能性は低いものもあると筆者は考えている。実際につなげていくためには、一般科目の授業において教員側から授業内容が実際に将来キャリアに生かせることを授業内で説明している、もしくは学生側が普段から将来キャリアに生かせることを認識して受講していることが必要となる。しかし、現状一般科目の授業内でもれなく学生に十分認知させているとは思われない。一般科目の中でも特にICTに関連する科目内容は学生の将来キャリアに役立つことが想定される。今日の高等教育機関においては何らかの形で多くのICT関連教育が行われ、その時点での最新のICTスキル修得が行われている。しかしICT技術は長年にわたり進化を続けており、学生の卒業後も進展し続けることが想定される。そうなると、要員に要求されるICTスキルもそれにあわせて向上させていくことが要求される。これは他の知識、スキルも概ね同様で、ICTスキルに関連する教育をはじめとする様々な一般科目の教育内容が自身の将来キャリアに役立っていくことと、さらに学び続ける必要があることをキャリア教育の中で十分認知させることが重要となる。

以上を鑑み、本稿では現在高等教育機関で実施されているキャリア教育において、先に示したライフプランとリスクリングの要素がどの程度実現されているかといった状況に加え、一般科目とキャリア教育の連携と、その中に具体的にICT教育が含まれているかについても調査・分析を行っている。

## Ⅱ. リスキリングの教育実施タイミングについて

リスキリングは、人生に予期する／しない転機が訪れ、そこで必要に応じてキャリア・トランジション（≒職の移行）が行われる時に必要とされる。N. シュロスバーグ（Nancy.Shlossberg 1989）は、キャリア・トランジションのタイプを「自分で選んだ転機」「突然の転機」「ノンイベント型の転機」の三つに分類し、人それぞれに起こり得ることを論じている<sup>3</sup>。「突然の転機」は主として外的要因により起こり、他の2つの転機は主に内的要因によって起こると思われ、いずれにせよ誰にでも起こりうるものである。

実際に社会人生活に入った後に、業務を取り巻く環境変化等による外的要因（例えば企業指示）により新たな業務に取り組む必要性（場合によってはリスキリングを伴う）が生じた場合、要員が直ぐに判断できる場合は問題ないが、現実的には困惑することが想定される。日々の業務に携わっている状況において、その時携わっている業務の延長上であれば想定することは可能と考えられるが、リスキリングを伴うスキルチェンジが必要となるようなレベルの変革を予測する余裕は現実的にはかなり少ないと思われる。

一方、リスキリングの後に転職することが想定されるといった内的要因による場合は、基本的に企業側が示唆することは想定されず、要員自身が気づき行動していくこととなる。この場合具体的にリスキリングに進む段階で迷った場合は、リスキリングの環境を自身で探したり必要に応じて転職サポート機関をはじめとする相談窓口を頼ることが想定される。しかし、そもそも自身が認識していない状況下においては結果的に気づくことが出来ない、または遅れることも起こり得るのである。このような状況を想定すると、要員は必要に応じて自身のキャリアについてその後のライフプランへの影響も踏まえたキャリアプランを再構築することと、必要に応じてリスキリングを伴うスキルチェンジが必要となる可能性をあらかじめ理解しておくことが肝要となる。

ではそれをいつ行うかということであるが、これら課題は全ての要員に起こり得ることを想定すると全員が漏れなくあらかじめ認識しておく必要がある。具体的なタイミングとしては、入社後に企業が教育する場合と、現状教育機関で広く実施されているキャリア教育の中で行うことが想定される。しかし企業の教育投資が減少傾向にある状況下で、将来起こるかどうかが未確定な要員を取り巻く環境変化に対する教育を、全企業がすべての要員に対して網羅的に実施する体制を実現することは今後より一層困難となっていくことが想定される。その一方、高等教育機関では既にキャリア教育が実施されており、特に要員に対して網羅的に教育する必要性を考えた場合、そのカリキュラムに組み入れることが有効であると筆者は考えている。

## Ⅲ. 高等教育機関におけるキャリア教育科目の調査・分析

### 1. 調査・分析対象データ

各高等教育機関でのキャリア教育は、今日ではそのほとんどで何らかの形で実施されていることが想定される。しかしその内容は個々の教育機関により様々で、そのコンテンツは統一されて

いない。そのため、本稿では各高等教育機関が実施しているキャリア教育の内容について、公表されているシラバスと各種情報を用いて調査・分析を試みることにする。特にシラバスには授業名、講義概要、到達目標、各回の授業内容等が記されており、各教育機関で開講されている科目の内容を知ることが可能で、分析対象として適していると考えられる。また、必要に応じてカリキュラム体系等の情報も併せて確認していくことにする。なお、シラバスは2023年10月1日から10月30日に収集したものを対象とする。

そして対象とする高等教育機関については、文部科学省の「令和4年度全国大学一覧」<sup>4</sup>の国立大学、公立大学、私立大学一覧よりランダムに選んだ大学を対象とする。

#### <調査・分析対象校抽出条件>

- 対象大学  
国立大学、公立大学、私立大学  
(大学院大学も含む全813校)
- 対象校抽出  
乱数を使用してランダムに並べ、シラバスが確認できた50校を抽出し調査・分析対象とした<sup>5</sup>

次に選択した大学のキャリア教育科目の選定についてであるが、調査時点で各校に設置されているキャリア教育の基礎的位置づけと想定される科目(キャリア教育系基礎科目)を対象とした。実際のキャリア教育科目の設置状況は教育機関毎にまちまちであるが、その構成の多くはキャリア教育系基礎科目が設置され、その先に発展系科目がいくつか設置されるという構成をなしている<sup>6</sup>。また、特に発展系科目については選択科目としていることが多く、受講学生が網羅的とは言えないことが多いと想定されるため、今回は必須科目や共通科目を中心として比較的多くの受講生を対象とした基礎的な位置づけと思われるであろう科目を選定した。具体的にはカリキュラム構成、シラバス検索、キャリアサポート体制等の各校に存在する情報を基に確認し科目選定を行った<sup>7</sup>。

## 2. 調査・分析項目

筆者は、キャリア教育はその対象者が「働く」というキャリアを終えるまでを対象とすることが肝要と考えている。もしキャリア教育が入社までを主体として行われた場合、現在の予測困難なVUCA<sup>8</sup>の時代において、学生が将来キャリアチェンジが必要な局面に遭遇した場合にそれに対処する知識を持ちえないとその場で混乱を来すことになるからである。そのため、本稿ではシラバスを中心としてこの困難を乗り越える知識を得るために以下の視点が重要と考え、その視点での調査・分析を試みるた。

- ① ライフプランに関わる内容が明示されているか

- ② 将来的にスキルチェンジのために、新たなスキル修得が必要になる可能性があることを網羅しているか、また具体的にリスキングの内容に触れているか
- ③ 「キャリア科目以外の科目（一般科目）を通して修得した内容が、将来キャリアに生かせる」という内容を網羅しているか、また具体的に ICT 関連の内容に触れているか

まず①についてだが、この点については拙稿<sup>9</sup>にてその必要性を詳述しており、本稿では実際の状況を調査・分析することとする。②に関して児美川（2013）は、変化が速すぎる未来に対して「今」立てたキャリアプランがそのまま通用しないこともあり得るという想定のもとで、高等教育機関におけるキャリア教育に関しては将来の見通しややりたいことを無理やりに見つけようとするのではなく、社会に出た後も継続的に学びキャリアを作っていけるような考え方やスキルを身につけることが重要であることを論じている<sup>10</sup>。学生が社会に出るうえで最後の学びの機会となる高等教育機関におけるキャリア教育の場では、学生が将来にわたり学び続け、スキルを磨き続けることの重要性をしっかりと教授することが重要となるのである。本稿ではその状況がどの程度実現できているかを確認したい。最後に③についてだが、これに関しては竹内（2017年）が近年は大学在学中に就職支援を経たうえで就職するという、大学から社会へと結ばれる線が用意されていることを示しており、その流れの中でキャリア教育系の科目とはかの科目との相互関連性が問題として残ることを示している<sup>11</sup>。一般科目には実務に近い ICT 関連科目から一般教養科目にいたる様々な科目が存在している。その中で、一般教養科目についてはビジネスの世界にはさほど役に立たないのではないかと意見が聞かれることもあるが、一般教養の価値について大久保（2006）は「考える幅を広げる上で重要なのが一般教養である」と論じている<sup>12</sup>。一般教養科目は発想の広がりや概念的な思考力を高めることにつながると論じられており、そもそもビジネスを進める上での話題にもなり得ることを示している。筆者も企業で勤務した経験を有しており、大久保の論は的を射ていることを実感してきた。従って、本稿においてはキャリア系科目以外の全ての科目を一般科目としてとらえ調査・分析に取り組むこととする。

### 3. 調査・分析方法

次に実際の調査・分析方法についてであるが、シラバスの調査・分析に関しては、主にデータマイニングを利用した先行研究が存在している。三好（2012）はシラバスの科目分類（共通コース科目、一般教育科目、学科科目等）、科目種別（一般教養科目、キャリア基礎選択科目等）、授業科目名称に分けてキー項目を設定して分析データ抽出をしている（各回の授業内容までは分析していない）<sup>13</sup>。調査の過程では授業科目名称レベルで表示される項目数が多いため、分析するためにデータを別途作成したうえで関連性が調べられている。分析データをあらかじめ作成してシラバス分析を行うという手法を利用した研究は他にも熊丸（2018）が実施している<sup>14</sup>。また、シラバスの各回授業内容の分析まで踏み込んだ先行研究には三浦（2021）が取り組んでいる<sup>15</sup>。しかしこの研究においてもやはり抽出単語が多いため、上位のキー項目を対象に分析が進められている。これら先行研究ではキー項目の選定が重要となっているが、いずれもその特定化が困難

である程度絞ったうえで分析がされていると思われる。

しかし、今回調査対象としているライフプラン、リスクリング、一般科目との連携については、キー項目を選定してデータマイニングを利用することは本稿の調査・分析時点では困難と考えている。特にリスクリングについては、現状ではまだカリキュラムに組み込まれていないことも多いと想定される。先行研究からも分かるようにデータマイニングを利用して分析を行う場合はキー項目の選定作業が重要となるが、それは逆に探索範囲を狭める可能性を有すこととなり、今回のような新たな概念も含む調査・分析においてはそれら手法の活用は困難と考えた。それに加えてシラバスについては、記述量にばらつきがありシラバス分析時には記述量の多少により専門用語の重みが変わる<sup>16</sup>ことや、科目によって教員数や参考書の数が一定でないなどの非定型な部分と、科目名などあらかじめ決まっている定型な部分が混在し、構造が複雑になっている<sup>17</sup>、といった統一性のなさが指摘されている。これらを勘案して今回の調査・分析においてはシラバスを確認できる高等教育機関を50校抽出し、目視で確認することとした。今回の調査・分析結果にてキー項目等に関する知見を得た後は、最終的にわが国全ての高等教育機関を対象に調査範囲を広げていきたいと考えており、今回はそのパイロットを兼ねることとする。

#### 4. 倫理的配慮

本研究の分析対象データはすべて公表されているものを利用するため、特に倫理的配慮として記載する事項は存在しない。

### Ⅳ. キャリア教育科目のシラバス調査・分析結果と考察

ランダムに並べた大学を上位から82校を調査した時点で、キャリア教育系基礎科目のシラバスが50件(61%)確認できた。その時確認できなかった32校は、対応科目やシラバスが見つけられなかった等の状況であった。また、32校中14校(44%)は医療・看護・福祉系を主体とした大学であった。これ以外の医療・看護・福祉系を主体とした大学でキャリア系基礎科目の設置が確認できたのは1校のみであったことから、医療・看護・福祉系といった専門性が高く比較的進路が確定している課程においてはキャリア系基礎科目はさほど必要とされていない可能性があることが分かった。

以下に、Ⅲ章にて設定した分類に従った調査・分析結果を示す。

#### ① ライフプランに関わる内容が明示されているか

ライフプランに関わる内容が明示されている大学は50校中30校(60%)であった。しかし、実際の授業においては当該内容はほとんどの授業で含まれていると思われる。キャリア系授業の多くでは、キャリアデザインを行う時に人生のライフステージをイメージすることの重要性が示され、そこでドナルド E スーパー (Super.D.E.) が提唱したライフキャリアレインボー理論<sup>18</sup>が利用されている可能性が高いためである。しかし本稿では単に授業の中のアイテムの一つとして

紹介されている状況ではなく、各回の授業内容または授業概要等にライフプランに関する内容が明示されていることである程度時間を割いていると思われるものをその対象とした。この判断から漏れたシラバス内容を確認すると、どちらかという就職時点をゴールと定め、それに至るプロセスを中心として授業が構成されているものが多く見受けられた。そもそも就職が出来なければその後のキャリアが始まらないことを考えるとこれは間違いとは言えない。しかし、キャリア教育はキャリアを終えるまでを対象とすべきものにとらえた場合、40% 近くの科目で十分組み込まれていないという状況は、自身に主に外的要因による環境変化が起こり、それによりキャリアプランを変更せざるを得ないような状況に陥った場合に十分対応できない状況に陥ってしまうであろうことが想定される。そのために、本内容を組み込んでいない授業においては早急に授業内容を改善することが求められる。ただし、今回は調査対象としていないキャリア系の発展科目にて触れている可能性は否定できないことにも留意が必要である。

次に、実際にシラバスに記されている文面から抽出したキーワード（キー項目）順にソートしたデータを表1に示す。キー項目で最も多く含まれている語は「ライフプラン」で7件存在している。以下「ライフデザイン」が3件、「ライフイベント」、「ライフサイクル」、「ワークライフバランス」が2件となっている。また、「ライフ」を含んだデータは21件で、全体の66%となっている。今回の調査はキーワードのみでなく文脈も含めて判断しているが、もし今後データマイニングを利用した分析を想定した場合はこのままではデータの漏れが多くなるため、その部分をどう補うかを十分検討する必要が生じるであろう。

表 1. ライフプランに関わる内容が明示された教育機関一覧

| 学校名（仮称） | キーワード（キー項目）        |
|---------|--------------------|
| A-1     | 10年後どのような生活がしたいですか |
| A-2     | アンペイド・ワーク          |
| A-3     | 生涯                 |
| A-4     | 人生の節目              |
| A-5     | ライフ&ワーク            |
| A-6     | ライフ・デザイン・アプローチ     |
| A-7     | ライフイベント            |
| A-8     | ライフイベントとライフロール     |
| A-9     | ライフキャリア            |
| A-10    | ライフコース             |
| A-11    | ライフサイクル            |
| A-12    | ライフスタイル、ワークスタイル    |
| A-13    | ライフデザイン            |
| A-14    | ライフデザイン            |
| A-15    | ライフデザイン            |

|      |                 |
|------|-----------------|
| A-16 | ライフプラン          |
| A-17 | ライフプラン          |
| A-18 | ライフプラン          |
| A-19 | ライフプラン          |
| A-20 | ライフプランニング       |
| A-21 | ライフプランニング       |
| A-22 | ライフプランのデッサン     |
| A-23 | ワーク・ライフ・バランス    |
| A-24 | ワークライフバランス      |
| A-25 | 今後の人生・役割        |
| A-26 | 人生 (ライフタイム)     |
| A-27 | 人生100年時代        |
| A-28 | 生き方             |
| A-29 | 働くことと生きること      |
| A-30 | 未来を考える (卒業後のこと) |

② 将来的にスキルチェンジのために、新たなスキル修得が必要になる可能性があることを網羅しているか、また具体的にリスキリングの内容に触れているか

リスキリングの概念は近年登場したもので、シラバス内に直接用語として使用されている授業は今回の調査・分析では存在しなかった。しかしリスキリングの概念は、将来的にスキルチェンジのために新たなスキル修得が必要になることであるので、今回は新たなスキル修得について触れているかどうかで判定を行った。その結果、実際に対応している大学は5校 (10%) であった (表2参照)。多くの大学の科目にこの要素が取り入れられていないのは、企業に正社員で就職した場合に基本的に同一企業に勤め続けることを前提としたカリキュラムになっていることが想定される。佐藤 (2011) は企業内部の労働市場 (内部労働市場) という場において、長期にわたって正社員として勤続し、昇進し管理職になっていくタイプの伝統的な企業主導のキャリアイメージから、自分のキャリアを自分で考えるという内的キャリアの重要性が高まっていく個人主導の重要性が高まっていることを示しており<sup>19</sup>、本稿執筆時点の2023年度においても、雇用の流動化は進みつつあり、それに加えて政府をあげて労働移動も意識したりリスキリングの必要性が示されている現状を鑑みると、早急に授業内容に組み込み将来対応する可能性を有する学生達にその知識を与えておくことが肝要となろう。いずれにせよスキルチェンジは誰にでも起こり得るという前提で、その時場合によってはその時点で有していないような新たなスキル修得が必要になることをしっかり認識させることが重要となろう。



表2. 新たなスキル修得が必要になる可能性があることを内容に含んでいる教育機関一覧

| 学校名(仮称) | キーワード(キー項目) |
|---------|-------------|
| B-1     | 見つめなおし      |
| B-2     | 生涯発達        |
| B-3     | 変幻自在なキャリア   |
| B-4     | 変化する求められる力  |
| B-5     | トランジション理論   |

③ 「キャリア科目以外の科目（一般科目）を通して修得した内容が、将来キャリアに生かせる」という内容を網羅しているか、また具体的に ICT 関連の内容に触れているか

筆者は、そもそも本内容は元来授業に組み込まれているべき内容であると考えている。しかし実際に調査してみると、明示されていたのは3校（6%）と非常に少ない値となっている（表3参照）。このことはそもそも必要性が認識されていない可能性を示唆しているのではなからうか。また、その具体的なものとして ICT 教育があげられるが、今回の調査ではそれに触れている大学は存在しなかった。大学のキャリア教育における情報リテラシー科目の重要性について木村・粕川（2007）は、社会で活躍するうえで高等教育機関で学んだスキルを定着・意識させる意味からもキャリア系基礎科目にてその重要性を伝える必要があることを指摘している<sup>20</sup>。現代の「読み書きそろばん」に匹敵するとも言われている ICT スキルは業務に携わるうえで必須スキルであり、その巧拙が業務のアウトプットに影響しうるものであるため、将来のために「今」学ぶ価値を十分認識させることが重要となろう。この観点は ICT 教育のみならず、学生が高等教育機関で学ぶすべての知識、スキルに共通するため、その意識を学生にしっかり定着させることが必要となろう。

表3. キャリア科目以外の科目（一般科目）を通して修得した内容が、将来キャリアに生かせるという内容を網羅している教育機関一覧

| 学校名(仮称) | キーワード(キー項目)                  |
|---------|------------------------------|
| C-1     | ・生涯にわたって主体的に学び続ける<br>・創造的思考力 |
| C-2     | 在学中の過ごし方～ライフプランも含めた修正        |
| C-3     | 生涯キャリア発達理論                   |

## V. おわりに

今回取り組んだ調査・分析の結果（第IV章）からは、いくつかの動向を析出することが出来た。キャリア教育系基礎科目が見つからなかった中の医療・看護・福祉系大学については、そもそもその科目が設置されていないことが想定される。しかし、全員が医療・看護・福祉系に就職するとは限らず、特に福祉系については昨今離職後に他業種に移行するといった事象が起きてお

り、その場合基礎的なキャリア教育を受けていないことは後に問題となり得る。今後人々のキャリアが長くなることを想定すると、領域に関係なく基礎的なキャリア教育は必須とすることが求められるのではなかろうか。

次に今回調査・分析項目に設定した「①ライフプランに関わる内容が明示されているか」、「②将来的にスキルチェンジのために、新たなスキル修得が必要になる可能性があることを網羅しているか、また具体的にリスキングの内容に触れているか」、「③「キャリア科目以外の科目（一般科目）を通して修得した内容が、将来キャリアに生かせる」という内容を網羅しているか、また具体的に ICT 関連の内容に触れているか」については、全体的に少ない状況となっていることが分かった。①については60%ではあるが、キャリアデザインがライフプランと密接な関係であることを鑑みると、100%を目指す必要があると思われる。そして②と③については、今後その知識が必要とされる機会が増加していくことが想定されるため、早急な改善が必要とされるであろう。いずれにせよ、現状のキャリア教育系基礎科目の内容は旧来からさほど変化していないことが今回の調査・分析を通して確認された。この結果を受けて、筆者を含めたキャリア教育に携わる者は早急にカリキュラムを再考し、その間に知識を享受できない学生が出ないように努めることが肝要となるであろう。またキー項目については、①はある程度重複したキー項目が確認できたが、先行研究で示された手法を利用してデータマイニングを行うには統一性が不足している状況である。さらに②、③はそもそもデータ数が少ないため評価は困難だが、やはりキー項目の統一性は見られなかった。

次のステップとして取り組むべき内容は、以下の2点が考えられる。1つ目はカリキュラムの再考に際して、早急にそのカリキュラム案を提示することである。現在のキャリア系基礎科目は、現在の学生に認識させるべき内容が網羅されていないどころか、入社をゴールとした一昔前のカリキュラムのままであるものが散見される状況である。このような状況下でも高等教育機関は学生を社会に送り出し続けており、カリキュラムが改定されるまでの間に卒業した学生は情報・知識不足の人材となってしまうためその対応が急がれるのである。

2つ目は、今回の調査・分析をさらに広げるために、データマイニングを利用した方法への展開を検討することである。本稿では課題点を発見することとなったが、今後はそれを乗り越える手法を研究していくことが必要である。

以上の2点を今後の研究課題としていきたい。

## 〔注〕

- 1 板倉文彦「高等教育機関における キャリア教育の課題と方策」実践女子大学短期大学部『歌子』, 第二十三号, 2015年3月, 187-197頁。
- 2 板倉文彦「リスキングの展開に関する一考察」実践女子大学短期大学部『歌子』, 第三十一号, 2023年3月, 5-18頁。
- 3 Nancy.Shlossberg, *OVERWHELMED*, Lexington Books, 1989. 武田圭太・立野了嗣監訳『「選職社会」転機を活かせ』日本マンパワー出版, 2000年4月, 43-56頁。
- 4 文部科学省「令和4年度全国大学一覧」[https://www.mext.go.jp/a\\_menu/koutou/ichiran/mext\\_00006.html](https://www.mext.go.jp/a_menu/koutou/ichiran/mext_00006.html) (2023.10.9 閲覧)
- 5 Microsoft Excel の RAND 関数で乱数を割振り各校を昇順に並べたうえで、上位から順に調査を行った。

- 6 キャリア教育の発展形の科目例としては、インターンシップにまつわる科目や学部・学科特性に従った科目群（医療系、教員系、研究者等）が設置されていることが多い。
- 7 結果的に抽出した科目はすべてが必修科目ではないが、共通・基盤・教養科目群に設置されている、複数学部・学科に同一科目名として設置されている、単一学部・学科科目と想定されるが内容的に基礎的と判断できる等の視点で判断した。
- 8 Volatility（変動性）、Uncertainty（不確実性）、Complexity（複雑性）、Ambiguity（曖昧性）を示しており、今後の社会状況について予測がつきにくくなっていることを示している。文部科学省は、大学等における価値創造人材育成拠点の形成を目的とした事業背景として「VUCAの時代において、変化に対応し、不断に能力を向上させていくことが重要」であることを示している（文部科学省「リカレント教育の推進に関する文部科学省の取組について」、2022年9月）。
- 9 前掲拙稿「高等教育機関におけるキャリア教育の課題と方策」。
- 10 児美川孝一郎『キャリア教育のウソ』筑摩書房、2013年6月、172-173頁。
- 11 菅原・松下他編著『キャリア形成支援の方法論と実践』東北大学出版会、2017年11月、113頁。
- 12 大久保幸夫『キャリアデザイン入門Ⅱ専門力編』日本経済新聞出版社、2006年3月、91頁。
- 13 三好善彦「シラバスから行うカリキュラム分析」埼玉女子短期大学『埼玉女子短期大学研究紀要』第25、2012年3月。
- 14 熊丸真太郎「教員養成段階での学校安全・危機管理に関する教育」教員養成段階での学校安全・危機管理に関する教育『学校教育実践研究』第1巻第2号、2018年3月、25頁。
- 15 三浦修「福祉系大学における災害ソーシャルワークに関する授業科目のシラバス分析」新潟青陵学会『新潟青陵学会誌』第14巻第2号、2021年9月。
- 16 高木智美「XMLによるシラバスデータベースシステムの構築」電子情報通信学会、データ工学ワークショップDEWS2008、2008年。
- 17 野澤孝之・井田正明他「シラバスの文書クラスタリングに基づくカリキュラム分析システムの構築」、情報処理学会『情報処理学会論文誌』、Vol.46 No.1、2005年1月、292頁。
- 18 キャリアデザインにあたり、自身の年齢およびそこでのライフステージにより担う役割が変わることを認識し、それらを考慮しつつ総合的にデザインしていくことの重要性を示した理論である。
- 19 佐藤厚『キャリア社会学序説』泉文堂、2011年4月、3-5頁。
- 20 木村栄宏・粕川正光「大学のキャリア教育における情報リテラシー科目の役割」日本国際情報学会『国際情報研究』4巻1号、2007年9月、25-36頁。

## 【参考文献】

- Nancy. Shlossberg, *OVERWHELMED*, Lexington Books, 1989. 武田圭太・立野了嗣監訳『「選職社会」転機を活かせ』日本マンパワー出版、2000年4月
- 荒木淳子・伊達洋駆他『キャリア教育論』慶應義塾大学出版会、2015年6月
- 宇田美江『女子学生のためのキャリア・デザイン』2012年10月
- 大久保幸夫『キャリアデザイン入門Ⅱ専門力編』日本経済新聞出版社、2006年3月
- 柏木仁『キャリア論研究』文眞堂、2016年5月
- 金井壽宏『働くひとのためのキャリア・デザイン』PHP研究所、2002年1月
- 金山喜昭・児美川孝一郎他『キャリアデザイン学への招待』ナカニシヤ出版、2014年1月
- 川崎友嗣編著『大学生のキャリアデザイン 自分を知る・社会を知る・未来を考える』ミネルヴァ書房、2019年9月
- 児美川孝一郎『キャリア教育のウソ』筑摩書房、2013年6月
- 木村栄宏・粕川正光「大学のキャリア教育における情報リテラシー科目の役割」日本国際情報学会『国際情報研究』4巻1号、2007年9月
- 熊丸真太郎「教員養成段階での学校安全・危機管理に関する教育」教員養成段階での学校安全・危機管理に関する教育『学校教育実践研究』第1巻第2号、2018年3月
- 佐藤厚『キャリア社会学序説』泉文堂、2011年4月
- 菅原・松下他編著『キャリア形成支援の方法論と実践』東北大学出版会、2017年11月
- 高橋宣成『デジタルスキリング入門』技術評論社、2023年8月
- 鶴光太郎『日本の会社のための人事の経済学』日経BP、2023年4月
- 野澤孝之・井田正明他「シラバスの文書クラスタリングに基づくカリキュラム分析システムの構築」、情報処理学会『情報処理学会論文誌』、Vol.46 No.1、2005年1月
- 古田克利『キャリアデザイン入門 自分を探し、自分をつくる』ナカニシヤ出版、2019年5月
- 三浦修「福祉系大学における災害ソーシャルワークに関する授業科目のシラバス分析」新潟青陵学会『新潟青陵学会誌』第14巻第2号、2021年9月
- 三好善彦「シラバスから行うカリキュラム分析」埼玉女子短期大学『埼玉女子短期大学研究紀要』第25、2012年3月